

教育の魅力と悩み

私が研修生として初等中等教育局に来てから、もう3か月以上が過ぎた。私の研修期間は1年間。4分の1は瞬く間に過ぎていった。一体どれだけ、仕事で貢献することができているだろうか、迷惑をかけずに過ごせているだろうか、成長しているだろうか、派遣元に持ち帰ることのできる財産を得られているだろうか……。そう思うと、焦りのみが募ってゆく。

そんな折、最近知り合った後輩と時々話を交わすようになった。彼女はどうしても小学校の教員になりたくて、この7月にある教員採用試験に向けてひたむきに勉強をしていた。彼女は間違いなくいい教員になるだろう。そう思いつつ、ちょうど3年前、教員採用試験を前にして、悩みに悩んだ末に別の道を選んだ自分のことを思い出した。私も、大学に入った時から迷わず教員になる自分を思い描いて進んでいたが、学生なりに色々なことを経て、本当に教員になることがその時の自分の一番の希望であるか、即答できなくなった。そして、一旦は将来も含めて教員の道を選ぶことはないだろうと思ったときすらあった。

しかし、めぐりめぐって初等中等教育局で仕事をさせていただきながら、前述のような後輩や教員になったかつての学友の姿を見る今、結局私の心は大いに“ブレまくり”である。子供たちとともに新しいことを学ぶ日々を過ごす魅力は、むしろかつて学生として教員を目指していたころよりも強く感じられる時すらある。

自分という人間について、どんな形で教育に携わっていくことが最適なことなのか、きつとはっきり答えを得られることはないのではないかと思う。この考えは、変わらず持ち続けているもので、今後も変わらないものであるように思うが、だからこそ、自分の心の中に現れた変化には敏感かつ寛容でありたいと思う。

研修生としての期間と、人生そのものの時間、どちらも確実に4分の1以上を過ごしてしまったわけだが、いまだにはっきりとした答えを出せず漂い続ける私は、後輩の彼女のようにひたむきにまっすぐ進むことはできないけれど、自分なりの道を、自分なりのペースで歩いて行くことができたらと思う。今はとにかくひたすらに、目の前に広がる初等中等教育の世界をくまなく見ておきたいと思う。

(Y.M)